

一九七六年三月三日 (pp.189-213)

M. フーコー『社会は防衛しなければならない』

担当：K原

※細いフォントがK原のコメントです

今回の講義の内容

- 引き続き歴史知がいかに関争の道具として用いられてきたのかの説明？
- 今回の講義で、フーコーはフランス革命(1789-95)の、政治的・社会的闘争の人種の歴史という観点から、再解釈を行なっている。これまでブーランヴィリエを引いてきたが、彼の歴史の理解可能性原理からではなく、別の原理でフランス革命の再解釈を試みている？
- ブーランヴィリエは、フランス革命は外部からの野蛮なるものの「侵略」によるものだと考えていたが、その社会の構成員のなかでの闘争によって起こったとくつがえされた。
- これにより、歴史的言説が貴族だけではなく、さまざまな戦略において一般化されるようになった(=人種主義と結びついていく?)。

歴史知の戦術的一般化 (pp.189-90)

いかに歴史的言説は様々な戦略において一般化されるに至ったか？

フランス革命期(18世紀末)には、2つのプロセスを見てとることができる。

- 1) 18世紀の貴族的反動に結びついていた言説の、戦術としての一般化のプロセス
- 2) この戦術がさらに3つの戦術を生み出しつつ、3つの方向へ展開されていくプロセス
民族性(ナショナリテ)の戦術? : 話すこと→濾過1 : 絶対的濾過?
社会階級の戦術? : 労働すること→濾過2? : 自由の強調?
人種の戦術? : 生きること→濾過3? : 悪しき自由と善き自由の区別?

※1) は、2) のような戦術的多義性の理由になっている。

構成・革命・円環的歴史 (pp.190-3)

ブーランヴィリエは民族的二元性を歴史の理解可能性原理とした(p.190)。

これによって、円環的歴史と、野蛮人と未開人の対立が可能になる？

民族的二元性ってどういうことなのか確認したい。勝者-敗者の構図?あるいは敗者に関する二元性?

- 1) 戦いの核心を見つけ出すこと
→戦略的糸を結び直すことが課題

2) 裏切りなどの変化を可能にしたあらゆる許すまじき忘却と、同時に根本にあった力関係と対等に加えられた改竄(勝手な書き換え)を見つけ出すこと(=文書(エクリ)の領域)

→道徳的諸分割の糸を辿ることが課題

3) 善かつ真の力関係を見出し、明るみに出すこと

→政治と歴史の構成点と呼びうるものを、王国が構成される瞬間を厳密に回復することが課題

歴史の理解可能性が「点」「瞬間」(=単なる構成要素の1つ?)にあるのではなく、むしろ「構成」(=色々な力関係やそのバランス?)にあるのではないかと考えた。だから、フォーコーはむしろ理解可能性は法律の領域よりも力の領域に、文書の領域よりは均衡の領域にあるような何がしかを見出すことを問題とした。この構成とは、医学的かつ軍事的な考え方であった。善と悪との力関係であり、敵対する者同士の力関係である。この構成の瞬間に到達するためには、革命・回転のようなものによって接近できる構成を配置することが重要である。医学的かつ軍事的な考え方とは?後から出てきていたと思うが、人種的な考え方と、「奪う」=野蛮な考え方ということ?

→構成(=力関係やバランス)と革命(=ここではフランス革命)の概念を組み合わせることで考えることが重要になる。これらを組み合わせることで、円環的歴史(歴史を回転させ、出発点に戻らせることのできる何かが存在する)が可能になる。

未開人と野蛮人 (pp.193-6)

ブーランヴィリエは野蛮人という人物を配置することで、善いもの-悪いもの、真なるもの-そうでないもの(構成点)を見出そうとした?

- 未開人とは、そこから社会そのものが構成される要素として措定するものであり、本質的に交換する人間である(=基本的交換の主体)。契約前(法の交換者、財の交換者)
→契約後(社会の創設、主権の創設)

ブーランヴィリエは、この未開人の敵として未開人を対立させた。

- 野蛮人は、彼がその外部に位置する文明との関係によってしか、理解され、特徴付けられない、定義されない者である。野蛮人は先行する文明に侵入し、あらかじめ存在しているものを奪い、領有化する。それが彼の自由であり、それは他者の失われた自由に依拠する自由である。未開人の統治モデルとは、全く異なる統治モデルで動いている(軍事的統治モデル...というのつまり、ジャイアン第一定理「お前のものは俺のもの」?)
- 野蛮人を配置することによって、未開人(であった、社会的なタイプの関係に入ったものも含む)は常に「善なるもの」とされる。その役割は交換して、相互性をもって与える存在であることだから。一方野蛮人は常に悪しき意地悪な存在でしかありえなくな

る。

どのようにすれば野蛮と構成とをうまくつなぐことのできる点を確認できるか？どのようにすれば、野蛮人がもたらす暴力性、自由を機能させることができるか？

野蛮人および野蛮さを濾過する (filtering) ことが問題となる。どうフィルターをかけるのかに対するさまざまな解決策が、さまざまな戦術的立場を規定するようになる。

侵略してくる側 (ジャイアン) = 野蛮、文明 = 元未開人であり、野蛮人はのび太が持っていたものを領有する自由を持っていた。ということになる。このままだと、もともとある文明に革命を起こそうとすることは、侵略であり、野蛮な行為であることになる？

野蛮なるものの三通りの濾過：歴史言説の諸戦術 (pp.196-205)

革命か野蛮かではない。革命と野蛮ということが問題となっている。

革命における野蛮の構造 (エコノミー) には3通ある。どう自分たちの祖先について説明するか？

1) 野蛮なるものの濾過1つめ：絶対的な濾過

- 絶対に野蛮を許さないとすると、土地を奪って大移動し住み着いた自分たちの祖先のゲルマン的侵略は存在しなかったということにしなければならない。祖先は征服者 (= 奪った野蛮人) ではない。だから、貴族というのはそのようにして生まれたのではなく、人工的に作り出されたものだとする。→君主制の理論 (デュボワやモローまでの一連の歴史家による説明)
- こうなると (デュボワやモロー的には) フランク人 (= 野蛮な、あらかじめ存在していたものを奪った者) なんていなかったのだということになる。そうではなく、ローマ人が同盟者として頼ったのが、フランク人だったのだということになる。
- そのため、フランク人は侵略者、野蛮人としてではなく、役に立つ同盟の小民族として受け入れられた (1月28日の講義 p.76 で出てきた「ローマの親族」のようなイメージか)。そのためすぐに市民としての諸権利を享受することになった。つまり、同盟者としてのフランク人であり、侵略でも支配でもなく、移民と同盟であった。フランク人は吸収され、ゲルマン起源の移住者たちの影響をほぼ受けていないガリア・ローマ的構造の頂点の表面に単に乗っかっていた。という説明

→ブーランヴィリエが信じていたように野蛮な貴族がいたのではなくて、はなから絶対君主制があった。その数世紀後に断絶が生じ、侵略と似たことが起こったが、それは一種の内的侵略だったということになる。

- しだいに中央権力、独裁型の絶対権力の衰微をデュボワは見出す。中心権力の解体から封建制度のようなものが生まれ、貴族は次第に権力を強めていく。
- ブーランヴィリエがフランク人の時代に起こったことを特徴づけていた3つの要素 (侵略、征服、支配) を、デュボワは貴族の誕生に由来する、あるいはこの誕生に関わ

る内的な現象として再発見した。

→フランク人は全然野蛮ではありません（ブーランヴィリエによる言説がくつがえされる）。

→では侵略が侵略ではないとなると、次に歴史分析をする必要があるのは、征服の歴史つまり封建制の誕生および初期カペー朝だろうとなる。これも、軍事的勝利の結果や、野蛮人の侵入としてではなく、内的篡奪の結果として分析される。

→貴族とは野蛮人ではなく、政治的詐欺師だと説明される。

これが民族性の戦術ということなのか？うまく読み取れなかった。

2) 野蛮なるものの濾過の2つめ：野蛮な自由と貴族の排他的諸特権から切り離す

それまで君主制で、ローマの絶対主義だったところに、フランク人と野蛮人は自由をもたらした。この自由がもたらされたことを強調するのが、2つめの戦術である。これが社会階級の戦術ということ？

- 粗暴な蛮族の群れはガリア・ローマ社会体においてそのまま維持されることになる貴族の中核を構成する戦士のゲルマン人ではなく、武装した人民である。という説明（マブリ、ボンヌヴィル、マラにも見られる）
- 貴族制などではなく、兵士－市民という平等の人民しかいないフランク人の野蛮な民主主義があったということになる。この野蛮なフランク人の貪婪さ、利己主義は、ガリアに侵入したときはよかったが、いったん定住してしまうとむしろ欠点となった。フランク人たちは、実際には共和制を構成しているのに、自分たちは君主制の臣下だと信じている。→フランク的な野蛮がもたらした一般的民主主義は放棄されていき、君主的かつ貴族的な体系へと移行されていく。しかし、これに反動が起こることがある。
- それは、貴族階級に支配され、脅かされつつあると感じたシャルルマーニュが、人民たち（王には無視されてきた人民）に対して支持を求めた時である。シャルルマーニュは三月の練兵場（シャンドマルス）と五月集会を復活させる。

- 君主制の形象[ユーク・カペーの形象]

- シャルルマーニュの形象

→フランク人はたしかに野蛮だったけど、それは最初だけです。？

3) 野蛮なるものの濾過の3つめ：ゲルマン人の悪しき野蛮とガリア人の善き野蛮の区別

（ブレキニ、シャプサルなどの新しい説。19世紀の歴史家たちの説にもなる）

- 悪しき野蛮さ（ゲルマン人の野蛮さ）＝解放されるべき野蛮さ
- 善き野蛮さ（ガリア人の野蛮さ）＝これだけが真に自由の担い手

→ローマ人の政治システムは二層をなしている。という説明

- ローマ人はガリア人に、ガリア人がもともともっていた自由を委ねた。結果、至るところに諸々の自由が浸透しており、そうした一連の自由はつまるところ、ローマ人が手につけないまま残した古いガリア的、ケルト的な自由は諸都市において機能しつづけて

いく。この自由は都市的なものである（とはどういうことなのでしょう）。

→自由はローマ的絶対主義と両立する現象となる

野蛮なフランク人とゲルマン人は都市部は軽視し、農村部に定着する。その間に都市部は復興され、新たな富を獲得する。その富と自由や共同体のおかげで、戦い、抵抗し、反抗することができる。→先行する諸説よりはるかに第三身分が主張する説になりうる。

- これまでずっと絶対主義の色合いを帯び、つねに王の側にあったローマ性が、自由主義の色合いを帯びていく。ギリシア・ローマ的自治とは、第三身分の高貴さである。そうになると、君主主義者・絶対主義者でなくても、自由主義的なローマ性が存在することになり、ローマ性に回帰することができるようになる。→フランス革命において、ブルジョワでもローマ性に回帰することができた

方法の諸問題：認識論的領域とブルジョワ階級の反歴史主義（pp.205-8）

ここまで諸々の戦術の配置について取り上げてきた。それは方法的な理由と事実にもとづく理由がある。

<方法的理由>←よくわからなかった

- フランク人を称える歴史から、反対にフランク的民主主義の歴史へ移行することを可能にするすべての変化をたどることができる。これはそこには、あらゆる歴史言説をつらぬく一本の幅の狭い認識論的な横糸が存在する（とは？）。
- それは、同じように考えないことを可能にする条件、ちがった考え方をし、そのちがいが政治的に妥当なものとなるための条件となるものである。そのため、知における対立であると同時に政治における対立となるためには、幅の狭いネットワークが存在しなければならなかった（???）。

<事実にもとづく理由>

- ブルジョワ階級はずっと歴史に対してきわめて控えめな態度を示し、反発していた。（特に歴史についての説明をしたところで、自分たちの立場をそこに見出すことができないから）
- ブルジョワ階級の反歴史的性格には2通りの現れ方がある。
- 1つめは、歴史から逃れるという反歴史的性格である。18世紀前半、ブルジョワ階級は開明的な専制主義（=歴史）に対し、知や哲学や技術や行政などにより制限に依拠する君主権力の穏健な形式に比較的好意的であった。18世紀後半、フランス革命期に非歴史的な構成を要求することで、歴史主義から逃れようとした。ブルジョワ階級のルソー主義とは、未開人に呼びかけること、契約に呼びかけることであり、野蛮さやその歴史やその文明との関係によって規定された風景から逃れることであった。

革命期における歴史言説の復活—封建制とゴシック小説（pp.208-10）

ブルジョワ階級の反歴史的性格の2通りめは、むしろ歴史知を復活させること？

<歴史の復活1>

- ブルジョワ階級も、貴族階級から言及された歴史的事象に対する反論として、一連の歴史知を復活させた。それが、年中行事として機能していた一定数の歴史的瞬間および形式を復活させることであった。
→これにより、円環、回帰として理解された革命が視覚的に表現された。
- もうひとつ復活したのは、シャルルマーニュの形象である。シャルルマーニュ（ゲルマン的な王にしてローマ皇帝）はフランク的自由とガリア・ローマ的自由の連結点として理解される。1970年7月の祭典では、そこに集められた人民とその君主との関係、カロリング朝的な関係のあり方を、ある程度まで再構成し、復活することができた。

<歴史の復活2>

封建制に対する憎悪の形態

- ブーランヴィリエの説では、野蛮な貴族が侵略してきた→くつがえされる
- プロワヤール神父のテキストでは「私たちの仲間になりたまえ」と第三身分に言ってほしかった
- シェイエス、プーレ・ド・ラ・ムルト「これら出て行く者らは、征服の残滓にほかならず、フランス国民はそこから少しずつ解放されつつあった」
- ゴシック小説はつねに権力の乱用と憎悪の物語であった。